

阿比留高広さんに聞く

若者を先頭に 異なる立場を越え 新たなたたかい 「今 ここから」
ローマ教皇 広島・長崎で「核の脅威に団結を」

ローマ・カトリック教会の頂点に立つフランシスコ・ローマ教皇が2019年11月23日から26日まで来日し、24日に被爆地の長崎と広島を訪れました。「被爆地で核廃絶を世界に訴える」ためでした。広島市の平和記念公園でおこなわれた「平和のための集い」で、教皇は強い言葉で訴えました。「戦争のために原子力を使用することは、現代において、犯罪以外の何ものでもありません。人類とその尊厳に反するだけでなく、私たちの共通の家の未来におけるあらゆる可能性に反します。原子力の戦争目的の使用は、倫理に反します。核兵器の保有は、それ自体が、倫理に反しています」。

被爆者の証言を世界に広めるために、翻訳活動に取り組んでいる阿比留高広さん（25）＝京都外国語大学卒＝は教皇までの距離が20メートルほどの席で、この一言ひと言に耳を傾けていました。2018年12月、阿比留さんは「世界中の人々と手を携えて歩むことができれば、必ずや核兵器廃絶の日が来ると信じています。教皇のメッセージが核なき世界の構築のための大きな一歩になると確信しています」と、フランシスコ教皇の被爆地訪問を心から待ち望んでいる手書きの手紙を、日本語と英語と教皇の母語・スペイン語で書いて、長崎の被爆二世で、前田万葉・枢機卿(大阪大司教)を通じて届けていました。教皇の訪日直前に、この「平和のための集い」への招待状が届いたのです。阿比留さんは被爆者の証言を多くの言語で翻訳し、広める活動に取り組むグループ「被爆者証言の世界化ネットワーク」のメンバーです。若い世代は「核のない世界」を「新しい未来」を一步一步また、一步一步と引き寄せる可能性の塊です。フランシスコ教皇が被爆地で語りかけたメッセージが若者の心にはどう届いたのか――2019年12月1日にインタビューしました。



被爆者の証言を世界に広めるために、翻訳活動に取り組んでいる阿比留高広さん。京都外国語大学の平和活動の場で出会い、阿比留さんをいつも見守り、2018年夏、長崎での平和行事にも一緒に参加した被爆者の花垣ルミさん(右)。2019年12月1日、阿比留さんをインタビューした時の写真



2019・11・24、ローマ教皇が出席する広島での「平和のための集い」に招待された阿比留さん(後列中央)。2018年のクリスマス前に、ローマ教皇に手渡し手紙を受け取った前田万葉・枢機卿(前列)。

消された夢と希望 おぞましい一瞬ですべての人が結ばれた

広島でのスピーチで、教皇はこう切り出しました。「ここで、大勢の人が、その夢と希望が、一瞬の閃光と炎によって跡形もなく消され、影と沈黙だけが残りました。一瞬のうちに、すべてが破壊と死というブラックホールに飲み込まれました。その沈黙の淵から、亡き人々のすさまじい叫び声が、今なお聞こえてきます。さまざまな場所から集まり、それぞれの名をもち、異なる言語を話す人たちもいました。そのすべての人が、同じ運命によって、このおぞましい一瞬で結ばれたのです。その瞬間は、この国の歴史だけでなく、人類の顔に永遠に刻まれました」。

原爆は人間自体に 人類全体に落とされた

この語りかけが、阿比留さんの心には強く響きました。「原爆が投下されたとき、広島には異なる言語を話す人がいました。韓国・朝鮮語だけでなく、数は多くはありませんが外国人がいました。ですから、原爆はヒロシマ・ナガサキ、日本だけではなく、人類に落とされたこととらえるべきだと伝えようとしたのではないかと受け止めました。(世界で13億人の信者を有するキリスト教カトリックの)教皇として被爆地・広島という一点から広い目で見ると、原爆は人間自体に落とされたのです。原爆はヒロシマ・ナガサキだけの

2019・11・24フランシスコ・ローマ教皇が出席した広島平和記念公園での「平和のための集い」が始まる直前の会場：この集いに招待された阿比留高広さん撮影



問題ではないということです。被爆者の証言を多言語で翻訳し、世界に広めようと活動をしている自分にとっては、勇気づけられるメッセージです」。

専門はアラビア語 広がるエジプト・パレスチナとのつながり

阿比留さんが参加している「被爆者証言の世界化ネットワーク」は15カ国語で翻訳し、世界に発信しています。阿比留さんの専門はアラビア語。小学校の時に日本語などのように左から右に書くのではなく、逆に右から左につづる、流れるような文字に引き付けられ、大学でアラビア語を本格的にやりました。今は、身につけたアラビア語を自由に使いこなしてエジプト、パレスチナなどアラブの国々とのつながりが広がっています。

「被爆者の体験・経験を感情的にも、論理的にも理解してもらい、核兵器はなくななければならないというところまで行き着くためには、読む人それぞれの人の母語で伝えるのが一番なのです。教皇の言葉が私の背中を押してくれました。今回の教皇の訪日についての自分の体験・思いをカトリックのネットワークで世界中に送ってみたいと考えています」。

高校時代の苦い思い出 「原爆にもメリット」

阿比留さんには苦い思い出があります。高校生の時、一人で8月9日の原爆記念日に長崎を訪れました。帰宅して、「原爆はよくない。でも、戦争が早く終わったというメリットもあったかな」と言ったのです。すると、父親が「それは違う」と厳しく言い切ったのです。わかった気になっていた当時の私のなかには、「原爆投下が必要だった理由もある、と冷めた見方がありました」。大学時代に広島原爆資料館の被爆者の証言映像の翻訳などに深く関わっていくうちに、「父親の言ったのはその通りだとわかり、改めて重く受けとめました」。

長崎は 核兵器が悲劇をもたらすことの「証人」

フランシスコ教皇が11月24日、長崎市の爆心地公園でおこなった、言葉が明確で力強いスピーチ「核兵器についてのメッセージ」も、阿比留さんの記憶に深く刻まれました。

被爆地・長崎について、教皇は言いました。「ここは、核兵器が人道的にも環境にも悲劇的な結末をもたらすことの証人である町です。そして、軍備拡張競争に反対する声は、小さくとも常に上がっています」。

「武器の製造・改良はテロ行為」

続けて、「軍備拡張競争は、貴重な資源の無駄遣いです。本来それは、人々の全人的発展と自然環境の保全に使われるべきものです。今の世界では、何百万という子どもや家族が、人間以下の生活を強いられています」と

指摘しました。

その上で、教皇は強い言葉で警鐘を鳴らしました。「武器の製造、改良、維持、商いに財が費やされ、築かれ、日ごと武器は、いっそう破壊的になっています。これらは途方もないテロ行為です」。

阿比留さんは心を揺さぶられました。「各国の政治指導者たちに対して大きな影響力のある宗教界のトップが、核兵器をはじめとする武器の本質をわかりやすい言葉で解き明かしてくれたのです」。

互いの違いの垣根を越えて 平和を願う

その上に、「異なる言語」の壁を翻訳で乗り越え、被爆者の証言・体験を世界の人たちと広く深く共有するために活動している阿比留さんの背中を押してくれた教皇の言葉がありました。「共通の目的地をめざす中で、相互の違いを認めて保証する兄弟愛です。ここにおられるみなさんのなかには、カトリック信者でない方もおられることでしょう。でも、平和を求める祈りは、わたしたち全員の祈りとなると確信しています」。

阿比留さんは「教皇は、カトリック信者でない人とも宗教の垣根を越え、平和を願う祈りの声はともにできる、神は聞いていると語りかけたのです」と感動を隠しませんでした。阿比留さんが関わっている平和活動を共有し、情報を発信していく全国の若者たちの活動のキーワードは「協働」、「協力して働く」なのだというのです。

ローマ教皇の訪日から世界を考える

24日夜の広島での「平和のための集い」に参加した後、阿比留さんは夜行バスで長崎に向かいました。阿比留さんは2018年に、長崎や東京をはじめ全国の大学生とともに「ユース・ネットワーク・フォー・ピース」という平和運動に取り組む活動をスタートさせていました。25日には長崎大学で、「ここから始まる私の一歩～ローマ教皇来日から世界を考える～」の集いを企画。核廃絶や平和、戦争体験の継承などを話し合うのが目的でした。高校生や大学生ら約30人が参加しました。

ネットワークの暫定代表の大学4年生が「若者が、核兵器廃絶だけでなく国際協力や貧困への取り組みにチャレンジすることが大事だ」と発言しました。

核問題 8割は関心 平和活動参加は2割

しかし、同時に、阿比留さんは「一般的には若者たちはローマ教皇の訪日には特に関心はなく、有名人が来ているよう度といった程度です」と冷静に分析しています。

「ユース・ネットワーク・フォー・ピース」が2018年に高校生や大学生1200人を対象に核廃絶運動などに関する意識調査を実施。8割が核問題に関心はあっても、平和活動やイベントへの参加は2割にとどまっていました。その理由は、「周囲の目が気になる」「知識不足」。阿比留さんは「平和に関する活動は政治・思想的と見なされ、就職活動にマイナスになると危惧する若者も多く、敬遠されてしまう」と語っています。

SNSの世界で「生の声」聞かず 軸のない若者多い

今の若い世代が置かれている状況について、阿比留さんはこう分析しています。

「情報があふれているなかで、根本的に迷っています。SNSが当たり前の世界で、当事者・本人の生の声を直接聞き、話すのが難しくなっています。SNS、ネット・・・便利になりすぎて肝心なもの、大切なものが失われています。動く、行動する『原点』は『生の声』なのです。どう生きていくか、軸がない若者が多い。目の前のことで精一杯なのです」。

原子力利用はすべきでない

11月25日(月) 18:30~20:30
◎長崎大学文教キャンパス
グローバル教育・学生支援棟3階G-3S教室

※申し込み必須 From now on
ここから始まる私の一歩
～ローマ法王来日から世界を考える～

Presented by Youth Network for Peace

1部 パネルディスカッション
「若者の創造する未来」
【パネリスト】
・光岡華子「ナガサキの原爆ドーム」
・高橋悠太「『出会い』が変えた私の価値観」
・長久実由「アフリカで感じたわたしと世界」
・入江和希「私のきっかけ」
【モデレーター】
・中島大樹

2部 オンラインアクティビティ・
グループディスカッション
ローマ法王の来日をきっかけに、今、世界で起きていることに対して私たちは「何ができるのか」また「何をしたいのか」について、一緒に考えます！

申し込み
QRコードより

お問い合わせ Youth Network for Peace

阿比留さん企画の2019・11・25長崎大学でのイベントのチラシ

長崎と広島から発信されたフランシスコ教皇のメッセージが若者たちを含め、多くの人を励ましました。

2020年4月、ニューヨークで原水爆禁止世界大会が開かれます。教皇は、11月25日、東京で「2011年3月に起きた東京電力福島第一原発事故の被災者との集い」に参加しました。「便利な時代の恩恵を受けて生活してきたこと、被害者であるが、同時に加害者であることを自覚し、反省しています。私たちは今、生き方を問われています」と語りかけた福島県南相馬市の住職に、教皇は「ありがとう」と答えました。

フランシスコ教皇は、26日、帰国の機内で「個人的な見解だが、原子力の利用が完全に安全になるまで利用すべきではない」と述べ、原発を停止すべきだという考えを示しました。

教皇のメッセージを 原水禁世界大会ニューヨークの成功につなぐ

原水爆禁止日本協議会は、2019年11月29,30日に会議を開き、「原水爆禁止世界大会ニューヨーク」の成功に向け、話し合いました。福島県の代表は「教皇が原発事故に発言したことで多くの被災者を励ましている」と述べ、「世界大会ニューヨーク」に若者を送る決意を語りました。岩手県では、「ヒバクシャ国際署名」を高校の門前で訴え、生徒会の呼びかけもあり、123人が署名、23人がメッセージカードを書きました。

未来に生きるのは自分たち 動きはじめた若者たち

新しい地平を切り拓き、「核のない世界」への確かな道筋をつけるためには、「若い力」がつながり、線から面へと広がり、大きくうねっていくことが欠かせません。環境と貧困・経済格差の危機にさらされている世界中の若者たちが「未来に生きるのは自分たち、将来のためにたたかわなければならない」と声をあげ、行動に参加しはじめています。阿比留さんはこう言います。

「先輩方が築き上げてきてくれたこの世界を当たり前ものとして、常に謙虚に学び、考えることが大事です。今の若い世代も、将来の世代に責任を負っているのです。被爆・戦争体験世代のいない世界をどうするかは、今を生きる私たちにかかっています。最近、技術革新のおかげで世界の距離がどんどん縮まっています。しかし、人間の本质は、いつの時代でも変わらないように思います。どんなに性能の良い機械でも、結局、人間の『生の証言』にはかないません。被爆の過去と未来をつなぐ過程で、武器から対話、敵対から共同の輪が国や世代を超えて広げることができればと強く願っています」。

「核兵器廃絶」を訴えたフランシスコ教皇の力強いメッセージを生かし、思い切って大きな一歩を踏み出すのは、「今 ここから」です。

(聞き手＝非核の政府を求める京都の会の有志：新妻義輔、花垣ルミ、伊藤ともえ、馬場佳子)

